

近代英国翻訳論 —— 解題と訳文 トマス・フランクリン『翻訳：あるひとつの詩』

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生)

本稿は、18世紀中頃のイギリスで活動した翻訳家・文筆家であるトマス・フランクリンによる風刺詩『翻訳：あるひとつの詩』の本邦初訳を試み、近代英国および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まず当人の伝記的事実に短く触れ、そののち『翻訳：あるひとつの詩』について、底本テキストの検討、日本語による全訳、そして内容・背景についての解説および原注の訳という順に、まとめて記述する。

1. トマス・フランクリン小伝

トマス・フランクリン (Thomas Francklin) については、18世紀に多数存在した学者・三文文士・職業翻訳家の例に漏れず、あまり詳しいことがわかっていない。ここでは当時の名士録などを参照して、確認できた範囲の情報を提供したい。

1721年、ロンドンの書店主の息子として生まれる。ウェストミンスター校を経て、ケンブリッジ大学トリニティカレッジ在籍中から訳業を始め、20歳のときキケローの訳を出版したのを皮切りに、いくつもギリシア古典の訳を出して行く。学問も順調で1747年には修士号と上級研究員の地位を得、1750年にはギリシア古典の欽定講座教授となる。同時代の翻訳世相を皮肉りつつも自らの翻訳観を吐露した「翻訳：あるひとつの詩」はこの教授時代の1753年に公表されている。1759年学内紛争に巻き込まれ職を辞任すると、教区司祭となり、家業の書店を営むと同時に、その面前にある聖ポール寺院での説教者の任を引き受ける。前後してワイン商の娘と結婚もする。その後も翻訳活動は引き続き行ったが(ソポクレスやルーキアーノス等)、家計を支えるために批評や劇作にも手を出した。前者は毒々しい筆致で受けが芳しくない一方、後者の *Earl of Warwick, Matilda* といったいくつかの作品や、ヴォルテールの翻訳劇等はそれなりの経済的成功を収めた。生涯に多くの著作をものしたと言われているが、翻訳を除いてそのほとんどが現在読まれていない。文学的には、サミュエル・ジョンソンやジョシュア・レノルズといった人々と交流があったことが知られている程度である。1767年には王室付きの司祭に推挙され、1770年に博士号を取得した。1784年3月15日自宅にて永眠。

2. 底本テキストについて

この詩については、これまで信頼できる校訂本は存在していない。そのため、本稿では以下の初版本に拠った。

Francklin, Thomas (1753). *Translation; A Poem*. London: R. Francklin and R. Dodsley.

アンソロジーである Steiner (1975)にも収録されてはいるが、初出時にあった原注がすべて取り払われている。こうした自己言及の注釈は、風刺というジャンルを考えるとたいへん重要なものであり、作品理解のためには削除すべきではない。また、この作品には以下の再版もある。

Francklin, Thomas (1754). *Translation; A Poem, The Second Edition*. London: R. Francklin and R. Dodsley.

初版と再版は、文字組みや行数のカウント、広告の有無、句読点の打ち方が違い、文法上の修正と注釈が少し加えられているが、本文はほぼ同一である。

なお本稿では、連の区切りを線で示し、底本にあった行番号も、同様に訳文の右に添える。行番号は初版・再版ともに誤りがある（正しくは再版では不完全にしか修正されなかった）が、ここでは初版そのままとした。

3. 訳文

『翻訳：あるひとつの詩』

「かくたるや我らが驕り、愚昧、定め、
書く能わざる者の他に、翻訳するはなし。」
この業よく知る者デナムはこう詠い、
過ぎた年月が金言を真にしておるぞ。
傲岸不遜の貴族よ、相変わらず機知が 5
あまりある他の側面をさげすんでいる。
フェリペの子のごとく、偉ぶる才気は
未踏の道を、未知なる世を求める。
これにひるまず、不浄の手が古代の
雄弁の清流を分け与えるさなか、 10
銜う者は学者に似合いの仕事と引き受け、
阿呆は機知ある仲介者を持ち上げる。

—————

晴野で古参の兵が組み敷くは
 堅固で無敗の手強い一団。
 見よ！ 翻訳家来たりてみな薙ぎ倒す、
 下卑た手で一等の勇者らが墜つ。
 鷲の翼上でむせぶピндаロスを見よ、
 カウリーが襲い、氏も今やなし。
 ティブルの白鳥のため詩神が泣くもむなし、
 無情のダンスターに殺さる鳥を悼むのみ。
 オーグルビーとトラップにより偉大なマロ墮ち、
 チャップマンとオウジルでホメーロス死亡。

15

20

 清きアラブ平原にて弱まらぬ風が
 実に芳しい華や不滅に育つ実を、
 北方へとその気乗りしない客人を運ぶと、
 その実はしなび、その華は枯れる定め。
 たとえここでアテネの香りやローマ帝国の
 逸品が同じくやってきたとしても、
 それらはつれない闇で、やつれ病になり、
 その薔薇はしぼみ、月桂樹もみなしおれる。

25

30

 当世の評者は、その無学の矜持ばかりが
 大きく、身近な世を軽蔑しており、
 たまたまテレンティウスが人を魅了できると言われれば、
 めいめいがソポクレースになごんだ気持を抱くというなら、
 エカードの下劣な頁のために全馬舎を洗い流すか、
 アテネの舞台のためにアダムズのなかをのぞき込む。
 嬉々としてやつは奴隸的猿真似を通読し、
 己の思いつきを前に見つけてお楽しみになり、
 アッティカの機知が極めて低いと断じ、
 ギリシアをウォットンとペローに引き渡す。

35

40

 我らが浅薄な言語は、さらに浅薄な判断によると、
 古代の想念の力をけして伝えはしないと。
 ヴァンプラがすべての石を罵るのはもつともで、
 その石は巨大なブレナムの無様な柱を突出させている。
 罪なき筆はモーロをとがめて当然であり、
 悪筆であるし、アーサーの名声に泥を塗っている。

45

成功しない求婚者とは、口説いた乙女を呪い倒し、
やつらは言語をこういうものどけして理解しない。
その言語とは、シェイクスピアに名誉を与えたもの、
プライアとトムソンの名前を誇らしくするもので、
優美・上品に、アディソンのなかに流れるもの、
生来の魅力と自前の力をありったけ持つのである。
その美が輝くポリンブルックとスウィフトのうちに、
ロウのなめらかな詩句に、ジョンソンの神経質な詩行に
ドライデンの自由な気質、そしてミルトンの聖なる仕事に。

だが何たること！ 威を借ることを恥じよ！ 55 [ママ]

他人の名でのらりくらり生きるなかれ！
これだから、気高い魂のために目論まれた仕事が、
弱き者、審美眼なき者、見えぬ者に託されるのだ。
対象は卑しい哀れ者、金のために身を売って、
日中の労働を本屋カールに請け負わせ、
推敲もなく行を性急に進める不注意ぶり、
短気にもすぐ終わらせ飯を食らおうと急ぐ、
あるいは青白い術学者、頭でっかちにも、
長年いたずらに退屈な頁を骨折り進み、
その者がついに野心をもって示すのは、
愚者が何頁読めたか、いかに物知らずかということ。
こんなことで空想の翼でプラトーンとともに飛翔できようか。
こんなことでキケローの活発な精神を探れるものか。
偉大な自然の秘密の泉を暴けようものか。
ましてやこれで感受せる情熱を描き出せるというのか。 70
それでもこやつらはあえて重い槍を振るうだろう。
それでも七重の盾を構えようとするだろう。
アイアースの岩を子どもみなで投げたとしても、
若者みなでオデュッセウスの弓を引いたとしても。

いるのは、臆病にも行数を追おうとし、
原典を目の届くところに置きたがる者。
師の歩んだところに足跡を逐一つけて、
苦勞の末、道をもやで覆ってしまう。

いるのは、著者の想念を大胆にも手放す者、

あたかも機知の債を負うのが恥ずかしいかのよう。 80
 岸に旅の仲間を放置したまま
 大海原に乗り出し、別れて二度と会わない。

 反射から弱まった光をつかむ者もいる、
 疑わしい想念の薄光はほとんど何も伝えない、
 絵の絵があなたの視野に現れても、 85
 そこにある行は正しい姿でも真の姿でもない。

 かくして希羅は今様の衣で着飾らされて、
 ただ仮面舞踏会の時代衣裳となる。
 オウルズワスの韻文やワトソンの散文で変装されては
 いかなる古典の友が、変じたフラックスとわかるうか。 90
 偉大なロンギノスは、ウェルステッドに誉れを与え、
 かたやタキトゥスはゴードンにその名を貸し、
 無意味なこじつけがマントヴァの詩神を貶め、
 テレンティウスはスラム街の言語をしゃべる。

 このように学ぶと、英国の息子は衰えるに相違なく、
 母のライバルが賞を搔っ攫うのを目にする。
 武力同様技芸もガリアに屈し、いずれの分野でも
 やつが歓びに勝る技能ありと、認めるのか。 100 [ママ]

その自慢のダブランクールの現れたところに見えるのは、
 同じくモーニング、ブリュノワ、オリヴェ、ダシエ。
 古代の美点を逐一知らせるほど注意深く、
 自身の名誉を正しく他者へ高める者たち。
 これらが高い賞賛を誇るのも無理はなく、 105

国民は彼らに感謝し、君主も彼らに報いる。
 他の運命は我らが金づくの詩人に仕えるには遠く、
 冷笑がやつの賞賛、わずかな手当がやつの報酬。
 機知のさや当て、詩神の笑いの種、
 仇敵は嘲り馬鹿にし、友人でさえも貶す。 110
 偉大な翻訳者はそれぞれの劣等生に訳せと命じ、
 我々はみなティボルドやテイトと同列にされる。

 だが知れ、いかなる技芸が自身を誇り高く
 呼ぼうとも、息づく画布、彫刻された石、

詩人の韻文、これらはみな模倣であり、
偉大なる自然だけが本物 [オリジナル] なのだ。
その多様な魅力は多様な姿で表され、
我らを喜ばせる最良のものを、我らは最大限写すだけ。
そしてこれらは最も清らかな光のなかで、
女神を見せ、いまだ著しく皓々と光る。

115

120

だからこそ偉大なシェイクスピアが彼のギャリックに繋がられ、
互いに協力してともに精神を鼓舞しようとする、
それはつまらぬ猿真似の場面ではなくなり、
リア、ハムレット、リチャードそのものを我々は見るのだ。
我々が感じるのは、役者の力、詩人の火、
歓びとともに我らは賞賛し、恍惚とともに讃える、
技芸の範疇で、このような活力を見たことを、
そしてかくして作り話が人の心を征服する。

125

サルトの絵筆が忠実な線を辿るとき、
筆遣いひとつひとつが正しく、その構図も同等なので、
ジュリオが驚いて立ち上がるのを、彼は嬉しそうに見た、
自分の筆致、ラファエロの魔法の筆致とも見分けがつかなかっただけでなく
気づくと夢中になっていた頬の赤が、自分でなく
ライバルの魅力と美になっていたからだ。

130

やつらのは注釈と翻訳の仕事、
判断する者のように、模倣する者のように。

135

もし著者が恋人のように心を寄せないなら、
私たちはいかに傷を隠そう、艶に触れよう、
秘めやかな美をみな、いかに見つけようか、
して、たおやかな髷へといかに迫ろうぞ。
一々肌の荒れを治し、雅を磨き上げ、
その気高き愛で、どう相手を扱おうか。

140

知識ばかりを詰め込んだ審美眼のない
批評家が、薄明かりのもと熟読しても不十分。
誤った方角へ導く機知の光がぼんやり煌めいても、
あやしげな日をもたらしても、不十分なのだ。

145

もし部分的にも自然から何らかのものが与えられて
 結びつけられて天の寵児を祝福しないのであれば、
 もし秘密の共感によって繋げられ、
 忠実な鏡が同種の精神を映さないのであれば、 150
 魂から魂へ伝えられた火種が同質のものを
 捉え、熱烈な欲に火をつけないのであれば、
 ロウの恍惚なる調べのなかで生きるあの、
 ファルサリアを我々の目に与えたようなもの、
 それぞれ息づいたものが輝いている行である、 155
 我々にルカヌスの燃える魂が輝くのを見せたもの、
 もしくは良き歴史の頁を煌めかせるあの、
 スミスが後世の我々に誉れを届けたもの、
 ドライデンにあらゆる影響を及ぼし、
 その詩神に強力な死者の復活を命じたもの、 160
 ポープの大規模な才能のうちに輝き、不滅の
 ホメーロスを我々みなのものにしたものがなければ。

 誇り高き古代の見せるものすべてを刮目せよ、
 終わりなく賞賛される自慢の世継ぎを数え尽くせ、
 気高く考えた者、巧く書いた者、 165
 英国はその輝かしい者たちをずらりと見せられるのだ。
 思うに私は、個々の尊ぶべき亡霊が、根底から
 無視される代わりに、その嫡子を非難するのを聞く。
 なぜコングリーヴがアフェルの魅力を蘇らそうとしなかった、
 なぜ優しいハモンドがティブルスに生きよと命じなかった、 170
 プラウトゥスがヴァンプラの緩やかな頁で気に入られ、
 オトウェイがギリシアの舞台を歩むべきだった、
 ルーキアーノスがスウィフトに露わにされてこそ輝く、
 キケローはむなしくミドルトンを求め、
 リーウィウスの想念はシンジョンのような文体を欲し、 175
 プラトーンはメルモスやボイルなどを要する。

 存在する今でさえ、いつも知識は逃亡し、
 ゴシックの闇は、第二夜を広げる。
 学問はしおれ、粘り強い技芸も枯れるが、
 我らが時代の晩夜を煌めかせる者たちがいる。 180
 もう一度瞠目せよ、彼女の涙のうちに堂々と、

グレイによって飾られた素晴らしい哀歌が現れ、
一方でかたわらにやわらかなエルフリーダが立ち、
すべて我らの愛とすべて我らの悲しみを求める。
ローマの精神とともにジョンソンの勇ましい頁が 185
厳かに立ち上がり、金づくの時代を鞭打とうとする。
ブラウンは、聖なる真実の擁護の筆を引き、
アームストロングが自身の仁愛を描く。
古代の規範からこれら少数の高位者たちは、
その最良の形と鮮やかな観念を引き出す。 190
我々は、水の湧き出す泉を知っている、
流れの澄んでいることに不思議はない。

だがそれでも、良きギリシアよ、我々は汝の栄冠が千切られるのを見る、
汝がはまだぼつねんと残された祭壇で悼んでいるのを見る。
我々に対して汝の英雄は怒ったしかめ面を止めて、 195
恐ろしい憤りでうつむく。
ローマの涙が、損なわれた知識のために流れ、
アテネが、英国はおのれの敵だと悲嘆する。

あなたはここで立ち上がらないのか、おお！
誉れある息子よ、ギリシアとローマの名を取り戻すために。 200
押さえつけられた友人にお前の高潔な助けを受け、
お前の負う感謝の負債を支払おうとはしないのか。
もしくは、お前はまだその間違いを無情にも見られるというか。
ウォートンや私の仲間となる者はいないのか。

眉のまわりにマントヴァの蔦が巻き付くなか
アッティカの道を注意して歩くのが私のやり方。 206 [ママ]
名は知られていないが、歓びは欲しい、
震えながら私は不滅のソポクレースを探し求める。

ギリシアの天才、汝は私の胸を鼓舞する、
汝の詩人の火のどこか暖かい部分で、 210
不敬の手からそのよく愛された口を守れ、
酷薄なティボルドからその切り刻まれた名誉をもぎ取れ、
彼にもう一度、今度は優美な涙や同情の悲痛の
なかで、その胸の流出を命じさせるのだ。

父の死を優しいエレクトラが悼むか、 215
 もしくは弟の墓で悲痛をこぼすか、
 良きアンティゴネーがその悲嘆を吐露するか、
 哀れなテクメッサがその不運の境遇を嘆くか、
 オイディプースが運命の暗い宣旨に思い巡らすか、
 私が彼のように様々な情念を動かすことができたなら、 220
 グランヴィルは笑うだろうし、チェスタフィールドは頷く、
 教養ある学問の息子は各々評ずるだろうし、
 高貴な詩神たちも各々私をその友と見なすだろう、
 満足げなアイシスは妹たちの賞賛に加わり、
 拍手するカムはその詩を清めることだろう。 225 [正しくは計 224 行]

4. 解説・原注

第一連 1-12

冒頭からジョン・デナム「当訳の筆者に寄す」を引用し、稚拙な翻訳を批判するという立場を明確にしている。こうした風刺詩が初めから本の形で出版される背景には、18世紀英国における出版文化の隆盛と、翻訳文化の発展、そして〈風刺〉というジャンル自体の流行があったと考えられる。翻訳をする能力のない者として、学者と貴族が挙げられているのが特徴的で、学者を〈忠実すぎる者〉、貴族を〈勝手すぎる者〉と捉える。

第二連 13-22

翻訳行為を、原著者に対する翻訳者軍団の侵攻と見立て、偉大な古典作家たち（ピンドロス、ホラーティウス、ウェルギリウス、ホメーロス）の討ち死にを描く。原注にないジョン・オーグルビーは17世紀中盤の文筆家で、よく風刺の対象にされた。ティブルは現在のティヴォリでホラーティウスの別荘があった。ジョーゼフ・トラップは18世紀初頭の聖職者で、ミルトン『失樂園』のラテン語などとしたが、この人物もまた同時代によく批判された。ジョージ・チャップマンは17世紀初めにホメーロスを訳し後世にも影響を与えたことで文学史的にも有名だが、その訳は良くも悪くもきわめて特徴的で、18世紀前半の会計士であるジョン・オウジルもその訳は賛否両論だった。

原注 18 行目 カウリーによる翻訳・模倣ほど見下げ果てた代物はない。我らが時代ほど賢明でなかった時代には、賞賛する者もいた。

原注 20 行目 神学博士にしてソールズベリー大聖堂受祿聖職者である S・ダンスターが英訳したホラーティウス『書簡集』『風刺詩』『詩論』を見よ。

[再版から] 原注 21, 22 行目 彼らのホメーロス、ウェルギリウスの翻訳を見よ。

第三連 23-30

翻訳による文化の移転がうまく行かない、ということ、を、比喩を用いながら説明している。

第四連 31-40

ここでは、17 世紀末～18 世紀初めに起こった〈新旧論争〉が意識されている。原注で触れられるニコラ・ボワロー＝デプレオーは〈旧〉つまり古代の優越を説き、のちに出てくるシャルル・ペローは近代の擁護をしたとされるが、そこへ翻訳を絡めると、実践としては立場が反転するなど、どちらも単純な構図では測り得ない。またコーヒーハウスは、17 から 18 世紀にかけて人々が集まり、互いに意見を交わしたり、そこへ向けて雑誌・新聞が発行されたりと、ひとつのメディアでもあった。エカードは後述。

原注 31 行目 ボワローによれば、翻訳が美しいということは、古代のものを味わいそのままに写していない証左で、それこそが翻訳者の基礎指針として与えられるものであり、訳者らは、かつてそうであったように、今どうやって読者を喜ばせたらよいかわかっているのである、とのこと。確かに、古代が、現代の無学の才人によって恥ずかしいものと捉えられてしまうのは、かなりの場合、悪い翻訳のせいである。

原注 36 行目 アダムズによるソポクレースの散文訳を見よ。

原注 39 行目 「極めて低い」とは、コーヒーハウスお決まりの文句。

原注 40 行目 ウォットンによる古代・近代学問論、ペロー『ルイ大王の世紀』の擁護を見よ。

第五連 41-54b

古代の作品が優れているから今に訳す、現代の言語は古代にも劣らないから訳す——新旧いずれの立場を取っても、翻訳は擁護されうる。この連では、前半部分では英語による駄作、後半部分では英語による名文家たちの紹介をしている。ウィリアム・シェイクスピア、ジョン・ミルトン、ジョナサン・スウィフト、ジョン・ドライデン、サミュエル・ジョンソン、ジョーゼフ・アディソンなどは、英文学史でもお馴染みの面々だが、ボリンブルック子爵は本名をヘンリー・シンジョンといい、英米の政治思想に影響を与えた 18 世紀前半の人物、ニコラス・ロウは 18 世紀初めの桂冠詩人、マシュー・プライアは 17 世紀末～18 世紀初めの詩も書いた外交官、ジェイムズ・トムソンは 18 世紀前半の詩人・劇作家。

原注 46 行目 アーサーの名声... ブラックモアの英雄詩『アーサー王』を見よ。

第六連 55-74

ここでは 18 世紀に粗製濫造された翻訳について述べられている。エドモンド・カールは、18 世紀前半に活動した書店主・出版者で、海賊出版や俗悪本の出版など当時から悪評すさまじく、たびたび風刺のやり玉に挙げられていた。そういう意味では、フランクリンはそれまですでに（スウィフトやポーラによって）風刺されている人物ばかり攻

撃しているとも言える。

原注 60 行目 優れた原著者の悪訳のほとんどが、この紳士の校閲のもとで、三文文士によって行われた。この紳士が、拙速な作業と引き替えに、シート単位で彼らに支払いをしたのだ。

第七連・第八連 75-82

ここでもう一度、第一連で現れた〈学者〉と〈貴族〉が別の形で語られる。はっきりと両極端な訳を非難するという点では、17 世紀の翻訳論とは違って、ドライデンの批評の影響下にあると言えよう。原注の〈翻訳から翻訳する〉とは、もちろん重訳のこと。そのあとの記述は冗長だが、要は物を知らないから人名を正しく訳せなかった、ということ。

原注 75, 79 行目 読者においては、それぞれの意見が指し示す具体例が、とりわけ後者について、簡単に思いつくだろう。我が国の翻訳の半分は、原文に当たることもできないような連中によって、翻訳からなされているのである。こうした紳士のひとは、訳本のなかでハルカリナッソスのディオニュシオスに言及する折、こうした類の作家を知る幸運に恵まれなかったために、縮約するというフランス流の勝手に及んでしまい、はばかりなく彼をハルカリナッソスのデニスなどと呼んでしまう。こうして大きな誤りが引き起こされるわけだが、全体的に多くはないにしてもたいへんばかばかしいことである。

第九連・第十連 83-94

まがいものとしての翻訳。今風すぎる翻訳。ただ、民衆風の言葉で愉快的喜劇を書いたテレンティウスを、「スラム街の言語」で訳されてはならない、とするところには、ある種の階級性を読み取ることもできよう。一見、中庸を語っているように見えて、あくまでも自分の考える〈すばらしさ〉〈正しさ〉に固執し、翻訳の届け先を限定するあたり、細部には政治性や階級観などが宿っている。テレンティウスの翻訳としてここで想定されているのは、第四連でも「下劣な頁」とされた 17 世紀末のローレンス・エカードの訳。またフラックスとは、友情詩人とも目されたホラーティウスのことで、オウルズワスとは 18 世紀前半の古典学者エドワード・ホールズワス、ワトソンは同じく 18 世紀前半のデイヴィッド・ワトソンのこと。そしてマントヴァの詩人というのは、その近郊出身のウェルギリウスである。

原注 91 行目 ロンギノスのウェルステッド訳を見よ。ボワローの訳から一語ずつ置き換えたものである。

原注 92 行目 ゴードンに... この紳士はタキトゥスをたいへんぎこちなく不自然に訳し、言葉を入れ替え、ラテン語の慣用のように文末に動詞を置くなどした。生涯を通じて、タキトゥス＝ゴードンと呼ばれた。

第十一連 97-112

ここでは、翻訳におけるフランスとのライバル関係に焦点が当てられている。英国の意識として、全体的にフランスへの劣等感があり、それに対しての焦燥もここでは垣間見える。ティボルドは後述、ネイアム・テイトは17世紀末から18世紀初めにかけて桂冠詩人だった人物で、そのリア王の改作は、後世の批評家たちからさんざんに貶されている。ここでは過去の偉大なものから、ひどいものが生まれる、という例として引き合いに出されているようだ。

原注 99 行目 ガリアに屈し... もし我らが、技芸・学知を嫌うのと同じくらい、心からフランスを嫌う気になれるのなら、自分は我らの成功を確信できたのだが、と先の戦争の折、大才人に言われたものである。要するに、彼らは我ら以上にたいへんやる気があり、その結果、我ら以上に教養を身につけ、向上しているのだ。彼らの翻訳（とりわけ散文訳）は、もっと忠実たるべしというのが衆目一致するところだが、一般に言うと、我らのもの以上に、元氣澁刺としているのである。

原注 101 行目 フランス人はダブランクールの美点を高く評価しているため、彼のことを次の墓碑銘を受けるに値すると考えているほどだ。

この墓に眠るは、名高きダブランクール、
その才は、松明の如くその時代を照らした。
世に知られたその文筆では、全フランスが
ギリシアとローマを貴重な宝と褒め称える。
彼がいなくなれば、死者生者を問わず、
大損害だということなど、とても口にできない。

原注 111 行目 偉大な翻訳者... ポープによるアーバスノット宛書簡詩では、彼が痴れ者どもを列挙したあと、次の対句で締めくくられている。

これらすべてに、わが控えめな風刺が釈明 [translate] を命じると、
白状したのだ、そのような詩人九名がテイトのようなものを作った、と。

ここで翻訳 [Translation] が引き合いに出された際の、浅ましい意味合いこそ、その文芸分野で笑い物にはならなかったはずの人物を大勢、やぶさかにさせたことに間違いない。

第十二連・第十三連 113-128

当時の批評的文脈の影響が色濃い部分。1700年以前までは、〈オリジナル・本物〉といえば単に〈複製画に対する元の絵画〉という意味で、文芸では〈作品の手本とされるもの〉を指した。つまり、17世紀において原典とは〈あくまで手本として存在する対象物〉であった。しかし18世紀に入ると、模倣と〈オリジナル〉の関係が大きく変わり、世紀初めには〈オリジナル〉という言葉が自然との関係でとらえられるようになる。自然こそが芸術の〈手本〉であって、自然という外界の対象に対して正しく観察することがよしとされたのである。この一節で記されているのは、こうした18世紀的文脈における〈オリジナル〉である。ただ、その自然にもまだ〈手本〉として気付かれていない部分があり、それを〈新しく発見〉することもまた、そのあと一種の才として評価されて

くることになり、これを〈original invention〉といった。そして、世紀半ば以降、さらに発展して〈自然にない新しいものを作り出す〉という発想が生まれてゆく。ここで〈作り話〉が評価されるのもこの文脈（語の意味の移り変わる過渡期）のためである。今では〈originality〉〈creation/creativity〉という言葉で呼ばれるが、これを当時の批評用語で〈original composition〉と言い、この言い回しは世紀末のアレグザンダー・フレイザー・タイトラーまで引き継がれる。この言葉を〈原著〉〈原作〉〈原典〉〈ST〉のように訳す翻訳研究の書物も国内にあるが、明らかな誤りであり、多くの先行研究でもその定義は否定されている（Kelly, 2005b; Steiner, 1975; Zhang, 2002）。

第十三連・第十四連 129-136

模倣・オリジナルの旧来の意味と新しい意味との対立。サルトのエピソードは、オリジナルを越えた模倣についてで、そのあとの〈注釈と翻訳〉は、サルトと比べて〈新しい魅力がない〉ものとしての模倣について。意味の過渡期においては、こうした対立が重要なポイントとして注目される。

原注 129 行目 アンドレア・デル・サルトは、マントヴァ公フェデリーコから、レオ 10 世の肖像の模写を希望されて、たいへん精密にそれを行ったため、ラファエロのもとで元絵の衣文を描いたジュリオ・ロマーノはその模写をオリジナルと勘違いして、ヴァザーリに言った。「私は自分の手で書いた筆致なんて見たくないよ。」しかしヴァザーリが彼にデル・サルトの印を見せたので、彼は自分の間違いを納得したという。この話は、ド・ピールの『絵画論』第 1 巻 27 章に詳述されている。

第十五連 137-142

訳者と著者の関係を恋愛にたとえた一節だが、Chamberlain (2004)によれば、男女関係で読み解くと、フランクリンの詩は、翻訳者（男）が、原典（女）を、原著者（男）から奪うという形になっている。ただし、原典を mistress（恋人）と呼ぶ一方でその翻訳の特徴（女の良さ）を述べるときには his という形で所有物的に語っている。性別を混合することで、著者を創造的な役割から、テキストを抱きかかえる役割へと読み替え、翻訳者との関係において著者の力を弱めている。翻訳者の口説きによって原典はたらし込まれ、もっと美しくしてやると言われて進んで誘いに乗ってしまう——まさしく『不実な美女』だ、と読む(308)。また、Venuti (2008)は、この箇所や、この箇所の原注に引きずられてか、フランクリンの詩をロスコモンの焼き直しとしているが(63)、あまりにも浅い。

原注 137 行目 もし... ロスコモンの言葉「友を選ぶが如く、その著者を選ぶことぞ」、おそらくこのイメージは、もっと熱烈な感情から引き起こされるとした方がいいのだろう。

第十六連 143-162

「自然から何らかのものが与えられて」は、〈original invention〉を思わせる言い回し。

ここでは先行する翻訳で良いものを、その訳者の名前を挙げて紹介している。〈知識〉は〈学者〉、〈機知〉は〈貴族〉と、再び同じ否定的イメージが用いられている。〈共感〉〈鏡〉〈火種〉といった言葉遣いにある、〈つなぐ〉〈映す〉〈受け継ぐ〉という語感にも注目すること。

原注 149 行目 もし秘密の... 特定の著者への強い性向、翻訳者にある素質の類似は、機知や学識以上に、じかに必要なことだと思われる。

原注 156 行目 ルーカーヌス『ファルサリア』のロウ訳を見よ。その巻末に、まさしくオリジナルと同じ精神で書かれた短い付録がある。

原注 158 行目 近頃出版されたトゥキディデスのスミス訳を見よ。

原注 162 行目 ポープがそのホメーロスの格調高い訳のほか何も生み出さなかったとしても、詩人としての名声を確立するにはじゅうぶんだっただろう。

第十七連 163-176

ここでは、フランクリンが個人的に考えている、この作家（の文体）にこの古典作家を訳してほしかった、という夢のようなもの。つまり、原著者と現代作家のあいだで、性質・気質が似通っている（と彼が考えた）ものの組み合わせである。ウィリアム・コングリーヴは、王政復古期を代表する風俗喜劇の作家で、アフェルはテレンティウスのこと。ジェイムズ・ハモンドは 18 世紀前半に、ローマの抒情詩人ティブルスにならって哀歌を書いた夭逝の詩人。ジョン・ヴァンブラは 17 世紀末～18 世紀初頭の建築家で、劇作もした人物、プラウトゥスは古代ローマの喜劇作家。トマス・オトウェイは王政復古期の夭折の劇作家、トマス・ミドルトンは英国ルネサンス期の劇作家。ウィリアム・メルモスは 18 世紀前半の弁護士で、宗教についての思索的な書を著した文人でもある。ロジャー・ボイルは 17 世紀の文人・政治家だが、劇や詩なども書いて高い世評を得た。

原注 170 行目 ハモンド... 『愛のエレジー』の作家。

第十八連 177-192

ゴシックを〈中世的なもの〉と位置づけた上で、中世を技芸・学知の暗黒の時代と捉え、再び訪れることを恐れている。ここで紹介されるのは、同時代の優れた作家たちで、ジョンソンに至っては注を見てもわかるように、まだ現在主著とされている『英語辞典』『詩人列伝』『ラセラス』の出る前である。

原注 182 行目 『墓畔の哀歌』を見よ。

原注 183 行目 メイソン氏作『エルフリーダ』。

原注 185 行目 サミュエル・ジョンソン、雑誌「ランブラー」およびユウエナリスの美しい模倣 2 作の筆者である。

原注 187 行目 シャフツベリー卿『性格論』を見よ。

原注 188 行目 アームストロング博士の書簡詩「仁愛について」を見よ。英語最良の成果の一つである、健康についての詩の作者。

第十九連 193-198

同時代に優れた作家はいるが、優れた翻訳は少ない、ということ。ここでアテネを指す代名詞は her で、女神のイメージ。

第二十連・第二十一連 199-208

そこで、志と能力のある者は、自分たちに続いてほしい、と呼びかけている。その裏には、自分は翻訳が上手だ、という自負ももちろんある。ソポクレスの名前が出てくるのは、彼が当時その翻訳に取り組んでいたためで、それが二巻本として出たのが 1759 年。本人の自信を裏付けするように、そのソポクレス翻訳は、しばらくのあいだ最良の英訳と考えられたという。ほかにも、ルーキアーノスやパラリス書簡集などをギリシア語から訳している。

原注 204 行目 ウォートン氏は近頃ウェルギリウス『選集』『農耕詩』の新訳を出し、その優れた出来ではピット氏の『アエネーイス』と並び立つ。

第二十二連 209-225

〈ギリシアの天才〉および〈彼〉とは、ソポクレスのこと。ポープと論争したことで知られるルイス・シアボールドは、シェイクスピア全集を編纂したほか、プラトーンやアイスキュロスなどのギリシア語作品も訳した 17 世紀前半の事務弁護士 (1744 年没) だが、彼がソポクレスの先行訳を出していたため、フランクリンの仮想敵になっている。オイディプース、アンティゴネー、エレクトラは、いずれもソポクレス悲劇の題名にもなっている主人公で、テクメッサは『アイアース』の登場人物。ジョージ・グランヴィルは 17 世紀末～18 世紀前半の政治家で、その詩も人気があったが、何よりポープの文筆を励ましたことでも知られている。チェスタフィールド伯フィリップ・スタノップは同時代の政治家で文人、現在でもいくつかの名言の発言主として覚えられている。どちらも評価する人物として引き合いに出されている。アイシスとカムは、どちらも川の名前で、オックスフォード大学とケンブリッジ大学のことを指す。これもまた、評価を与える権威のこと。自分の翻訳がうまく行き、賞賛を浴びられるよう願って、その詩を終えている。

原注 212 行目 ティボルド (シアボールド) は、ソポクレスの劇を 2, 3 訳し、さらに多くの翻訳で公衆を震え上がらせた。

巻末

そして詩の終わったあとの巻末には、次の文句が添えられている。

「近刊 予約購読出版企画 『ソポクレス』 ケンブリッジ大学トリニティカレッジ 研究員・ギリシア古典教授のトマス・フランクリンによる無韻詩訳」

本文がたった 14 ページしかない小冊子であるが、そもそもは販売促進用に出されたこ

とが、この一文からもわかる。世の翻訳を毀誉褒貶しつつ、うちの出版者から出る（あるいはこの詩の執筆者の手がける）今度の翻訳は、悪くないよい出来ですよ、というふうに、風刺というジャンルを利用したわけである。ここでは翻訳を〈商品〉として売ろうという出版者・翻訳者のしたたかな戦略も見て取れるし、18世紀出版文化において発展した〈文芸翻訳の商業化〉を象徴する記述でもある。ただし、翌年に予告を抜いた形で再版されたことは、ただの販促を越えた反響があったということでもあるだろう。

.....

【著者紹介】

大久保友博 (OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生、大阪市立大学・同志社大学非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて文芸・美術書等の翻訳に携わる。連絡先：holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Abrams, M. H. (1953/1971). *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikin, J. (1803). Francklin, Thomas. *General Biography*. London, 210-211.
- Allen, R. J. (1933/1967). *The Clubs of Augustan London*. Hamden: Archon Books.
- Anonymous. (1798). Francklin, Thomas. *A New and General Biographical Dictionary*. London, 268.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*. New York: Octagon Books.
- Bassnett, S. (2002). *Translation Studies: Third Edition*. London: Routledge.
- Battestin, M. C. (1974). *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts*. Oxford: Clarendon Press.
- Brower, R. (1974). *Mirror on Mirror: Translation, Imitation, Parody*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Chamberlain, L. (2004). Gender and the Metaphorics of Translation. *Translation Studies Reader*. New York: Routledge, 306-321.
- Collins, A. S. (1927). *Authorship in the Days of Johnson: Being a Study of the Relation between Author, Patron, Publisher, and Public, 1726-1780*. London: Holden.
- Crown, B. (2005). *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse*. New Haven: Yale University Press.
- Cummings, R. and S. Gillespie (2009). Translations from Greek and Latin Classics 1550-1700: A Revised Bibliography. *Translation and Literature*, 18(1): 1-42.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*. Oxford: Oxford University Press.
- Francklin, Th. (1753). *Translation; A Poem*. London: R. Francklin and R. Dodsley.

- Francklin, Th. (1754). *Translation; A Poem, The Second Edition*. London: R. Francklin and R. Dodsley.
- Gillespie, S. (2009). Translations from Greek and Latin Classics, Part 2: 1701-1800: A Revised Bibliography. *Translation and Literature*, 18(2): 181-224.
- Hagstrum, J. H. (1958). *The Sister Arts: The Tradition of Literary Pictorialism and English Poetry from Dryden to Gray*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Johns, A. (1998). *The Nature of the Book: Print and Knowledge in the Making*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jones, S. (1796). Francklin, Thomas. *A New Biographical Dictionary*. London.
- Kelly, L. (1979). *The True Interpreter: A History of Translation Theory and Practice in the West*. New York: St. Martin's Press.
- Kelly, L. (2005a). Francklin, Thomas. *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 522.
- Kelly, L. (2005b). The Eighteenth Century to Tytler. *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 67-78.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*. Princeton: Princeton University Press.
- Lord, G. de F., E. F. Mengel et al. (ed.) (1963-1975). *Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verse, 1660-1714*, 7 vols. New Haven: Yale University Press.
- Matthew, C. and B. Harrison (ed.) (2004). *Oxford Dictionary of National Biography*, 60 vols. Oxford: Oxford University Press.
- Mercer, M. J. (2004). Francklin, Thomas. *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 20. Oxford: Oxford University Press, 753-754.
- Miner, E. (1971). *The Cavalier Mode from Jonson to Cotton*. Princeton: Princeton University Press.
- Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. London: Routledge.
- Renner, F. M. (1989). *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*. Amsterdam: Rodopi.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*. London: Routledge.
- Smith, F. S. (1930). *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*. London: Charles Scribner's Son.
- Smith, L. P. (1924). *Four Words: Romantic, Originality, Creative, Genius*. Oxford: Clarendon Press.
- Sowerby, R. (2006). *The Augustan Art of Poetry: Augustan Translation of the Classics*. Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1975). *English Translation Theory, 1650-1800*. Amsterdam: Van Gorcum.
- Trickett, R. (1967). *The Honest Muse: A Study in Augustan Verse*. Oxford: Clarendon Press.
- Tytler, A. F. (1813/1978). *Essay on the Principles of Translation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (2008). *The Translator's Invisibility: a History of Translation*, 2nd ed. New York: Routledge.
- Watkins, J. (1800). Francklin, Thomas. *An Universal Biographical and Historical Dictionary*. London.

- Zhang, K. (2002). "Original" or "Creation"? A New Understanding of Alexander Fraser Tytler's Principles of Translation. *Foreign Languages in Fujian*, 2: 50-55.
- Zwicker, S. N. (ed.) (1998). *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大久保友博 (2010) 「翻訳における一軸的批評の解体」日本通訳翻訳学会第 11 回年次大会口頭発表
- 大久保友博 (2011a) 「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博 (2011b) 「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会口頭発表
- 大久保友博 (2011c) 「私訳：George Steiner's *After Babel*」日本通訳翻訳学会関西支部第 27 回例会配布ハンドアウト
- 大久保友博 (2011d) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招待』6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2012a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』7: 107-124. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2012b) 「ロスコモン伯と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』6(2012): 13-20. 日本英文学会関西支部
- 大久保友博 (2013a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)」『翻訳研究への招待』9: 129-140. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2013b) 「George Sandys: 旅は訳詩とともに」17 世紀英文学会関西支部第 191 回例会口頭発表
- 大久保友博 (2013c) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ロスコモン伯ウエントワース・ディロン 『訳詩論』(抄)」『翻訳研究への招待』10: 65-82. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博 (2014a) 「『転身譜』第 15 巻跋詞の訳におけるジョージ・サンズの変容」『歴史文化社会論講座紀要』11: 55-65. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博 (2014b) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ホラーティウス『詩論』(抄) とその受容」『翻訳研究への招待』11: 35-44. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト